秋田県立博物館研究報告　第17号　21～28ページ　1992年３月

中山遺跡の編布試作

尾　関　清　子

1　はじめに

秋田県南秋田郡五城目町中山遺跡の編布(縄文晩期前半)は、筒状に巻かれ全長(幅)13cm、太さ1.0～1.6cmで編密度は、経糸が１cm間に７～８本(経糸間隔1.4mm)、緯糸は１cm当り10本という[1]現在までの出土品中(表１・図１)最も細密なものであるが、他遺跡同様編成法は基礎編布である[2]。なお、材質はいらくさ科のカラムシであり[3]、漆液の濾過精製に使用されたもの[4]と云われ黒色を呈している。また、その後の調べで、巻かれた部分の長さが推定で７～８cmあると云うことである。筆者は、この編布の試作をすることになったので以下に報告する。

2　製作した道具について

かつて筆者は、編布の製作技法について論じその中で、細密編布の道具について図２を示したが、その後における実験の結果、この方法では幅の広い(10cm以上)編布が編成不可能と分かり、今回は、図２のケタを写真１に示すケタに取り替え、図３のようにケタに沿って製作できるようにした。

この道具は、写真２に示す福島県大沼郡三島町荒屋敷遺跡出土の用途不明品(縄文晩期最終末～弥生初頭)にヒントを得たもので、直径２cmの木の幹に、太さ約１mmののり付けした糸を1.3～1.4mmの間隔に、ぐるぐる巻きつけこれをケタにした。そして図２のアミ脚とコモ槌はそのまま使用した。

なお、今回のような細密編布の製作に当っては特に、ケタに掛る経糸の長さを考慮した。それはケタの溝(1.3～1.4mm)が狭いので、いずれの経糸も同じ長さでコモ槌に巻き付けた場合、コモ槌部分が大きく広がり編成しづらくなる。そこでこの広がりを防ぐため、経糸の長さを長短不揃いにした。このようにすれば、図３と同様ケタに沿って編成出来るので、図２と比較した場合、能率的であり仕上がりもきれいで、しかも広幅のものも可能というメリットが認められた。

3　中山遺跡の編布試作

写真１により原寸幅13cm、丈７cmの細密編布を製作した。先ずカラムシ製の糸(太さ0.6～0.7cm)を約80cmの長さにて91本経糸用に切り、図２の　の要領で、それぞれのコモ槌に長短の差を付けながら巻き付け、それをケタに掛ける。緯糸も経糸と同じ太さのカラムシ製を用い、一段目を図４にしたがって左縄状に編む。この際、ケタの溝は狭く経糸も細いので、それをコモ槌もろとも指先で引き上げるのは困難なため、目打ちの先を利用したが、それでもなおかつ写真３・４のように、コモ槌がケタの前後に密集(182本)しているので、隣接する経糸を絡ませないよう苦慮した。製作技法はこの繰り返しの単純操作であるが、一段を製作するのに20分～25分もの時間を要しなければならなかった。

なお、仕上がった編布(写真５)には少々糸斑が生じた。その上今回は、コモ槌の重さを一定にしなかったのでやはり、丈にやや長短

東海学園女子短期大学

表１　編布の構造と材質

番号	遺跡名	時期	経緯別	撚り形式（方向）	糸間隔(mm)	編み密度（本／cm）	糸の太さ(mm)	材質	文献
1	朱　円	縄文後期	経		4～6		0.6 ～0.7		2
			緯	諸撚り　（左）		12	0.6 ～0.7		
2	忍路土場	縄文後期	経		10～12			オヒヨウ	1
			緯					オヒヨウ	
3	亀ヶ岡	縄文晩期	経	諸撚り？（右） 諸撚り　（左）	10				
			緯			6	1		
4	中　山	縄文晩期	経	諸撚り　（左）	1.4		1.0 ～0.7	カラムシ	1
			緯	諸撚り　（左）		10	0.7 ～0.8	カラムシ	
5	山　王	縄文晩期	経	諸撚り　（左）	8		1		3
			緯	諸撚り　（左）		8	1		
	山　王	縄文晩期	経	諸撚り　（左）	10		1		3
			緯	諸撚り　（左）		6～7	1		
6	押　出	縄文前期	経		1～1.3		0.7 ～1.0	アカソ	1
			緯	諸撚り？（左）		8	0.8 ～1.2	アカソ	
7	荒屋敷	縄文晩期	経		5		1～1.2		
			緯	諸撚り？（左）		6～7	1～1.4		
8	米　泉	縄文晩期	経	諸撚り　（左）	2.5～3.6		1.3～1.7	アカソ	1
			緯	片撚り　（左）		6.8～8.4	0.8～1	アカソ	
	米　泉	縄文晩期	経	諸撚り？（左）	2.5～3.3		0.8～1.3	アカソ	1
			緯	諸撚り　（左）		10～12	0.8～0.9	アカソ	
9	鳥　浜	縄文前期	経	諸撚り　（左）	10～15		2	アカソ	1
			緯	諸撚り　（左）		5～6	2～2.5	アカソ	
10	長楽寺 （阿弥衣）	鎌倉？	経	諸撚り　（左）	12.5～14.5		0.7～1.3	大　麻	1
			緯	無し		4～4.5	1.8～2	大　麻	
11	津南町 アンギン （袖ナシ）	江戸末期	経	諸撚り　（右）	7～10		2	カラムシ	1
		明治初期	緯	片撚り　（右）		2.6	3	アカソ	
12	十日町 アンギン （袖ナシ）	江戸末期	経	諸撚り　（右）	12～15		3.5～5		
		明治初期	緯	片撚り　（右）		2～2.5	4～6		

注　文献１．布目順郎　1989
　　２．小笠原好彦　1970
　　３．伊東信雄　1966
　　諸撚り（左）　右撚りの糸を２本合わせ左撚りにする

図１　編布出土遺跡・資料の分布

表２　衣服製作における所要日数の比較（但し着分編布製作のみ）

遺跡名	時期	経糸間隔(mm)	緯糸編密度（本／cm）	幅25cm当たりの所要時間（分）	5mの総段数	１日８時間製作（日）
中　山	晩期	1.4	10	40	5000	417
朱　円	後期	4～6	12	4.3	6000	54
亀ヶ岡	晩期	10	6	1.3	3000	8

が見られた。

4　まとめ

きわめて単調な作業ではあるが、予想以上に手間の掛ることがわかった。当時はこのような細密編布が漆漉しや、トチの実のアク抜き用に使用されたと云われているが[5]、縄文人はこれ程面倒なものをどのような道具で製作したのであろうか(一部の布目圧痕については、越後アンギンの道具に類するものであることが判明している)[6]。

編布についてこれまでの定説は、編成に時間がかかり、布目は織布よりはるかに粗く衣服を作る素材としては適していない等と云われているが、試作した編布は確かに時間はかかるが、編密度は細かく、材質もカラムシであり、当時の衣服としては最適であったと思われる。筆者は生活学の立場から、編布を衣服(遮光器土偶式のもので幅25cm、長さ5m)として製作した場合の編成における所要日数を表2のように割り出してみたが、それによると、中山遺跡のものは、一日8時間編み続けたとしても一年有余かかることになり、これだけを見れば長く感じられるが、欲しいもの何でも求められるいわゆる過飽和と云われている現在ですら、より良いものを追求するには、やはり手間暇を掛けなければならない。その最たる例としてあげられる「京鹿の子」(疋田絞)の振り袖などは、指先だけの作業に数ヶ月を要すると云う。

また筆者は、数年前土偶の結髪を調査した。そして、単純なオカッパから複雑かつ技巧をこらした美的形象に至るまで多種多様であることを観察し、中期あたりから結髪の兆しを見、後期から徐々に結髪文化が発生したことを確認した[8]。これらの事実より、衣服あっての結髪と云っても過言ではない。したがって中山遺跡の編布は、たとえ長時間費やそうと衣服としても製作されたものと判断したい。すなわち、ハレの日の装いとして丹精こめた衣服は、親から子へと譲り継がれたのではなかろうか。一片の編布から、縄文女性の温い思いやりを垣間見ることが出来るようだ。

註

(1)　永嶋正春　「中山遺跡出土漆関係遺物に見る縄文時代の漆工技術」　『中山－中山遺跡発掘調査報告書』　秋田県五城目町教育委員会　1984

(2)　尾関清子　「縄文時代の布－編布・織布とその製作技法」　『生活学1989』　日本生活学会　1988

(3)　布目順郎　『絹と布の考古学』　雄山閣　1988

(4)　高橋忠彦編　『中山－中山遺跡調査報告書』　秋田県五城目町教育委員会　1984

(5)　尾関清子　「縄文時代の布について－千葉県香取郡山田町姥神遺跡採集の土製品の考察」　『フィールド考古足あと』　足あと同人　1991

(6)　渡辺誠　「編布の研究」　『日本史の黎明八幡一郎先生頌寿記念考古学論集』　六興出版1985

(7)　前掲(5)

(8)　尾関清子　「縄文時代における結髪の特徴」　『生活学1987』　日本生活学会　1986

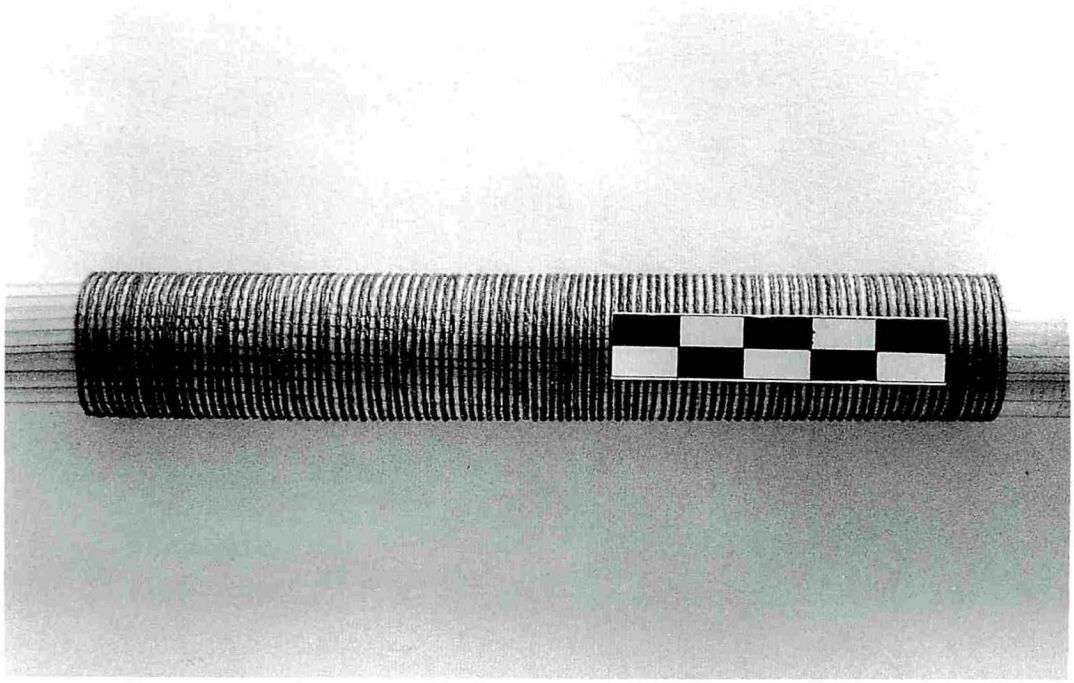

写真１　福島県荒屋敷遺跡出土の用途不明品にヒントを得て作ったケタ

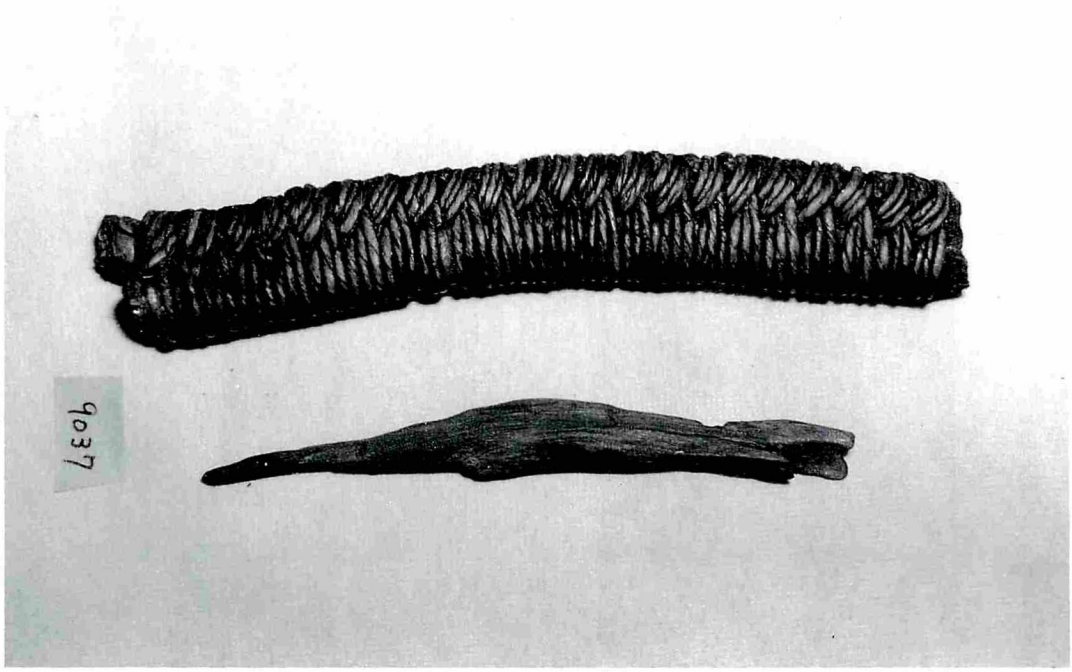

写真２　福島県大沼郡三島町荒屋敷遺跡（縄文晩期最終末～弥生初頭）用途不明品

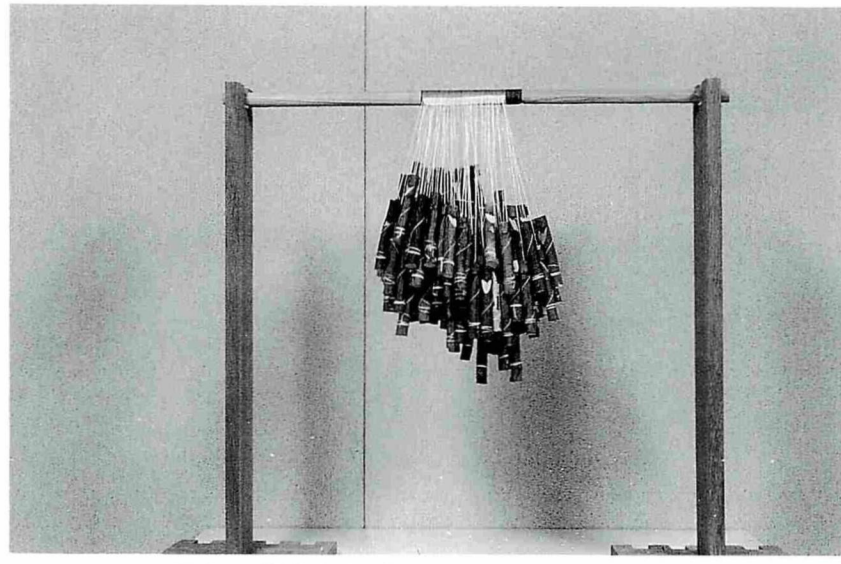

写真３　写真１のケタを使った細密編布用の道具
ケタの前後にコモ槌が182本下っている

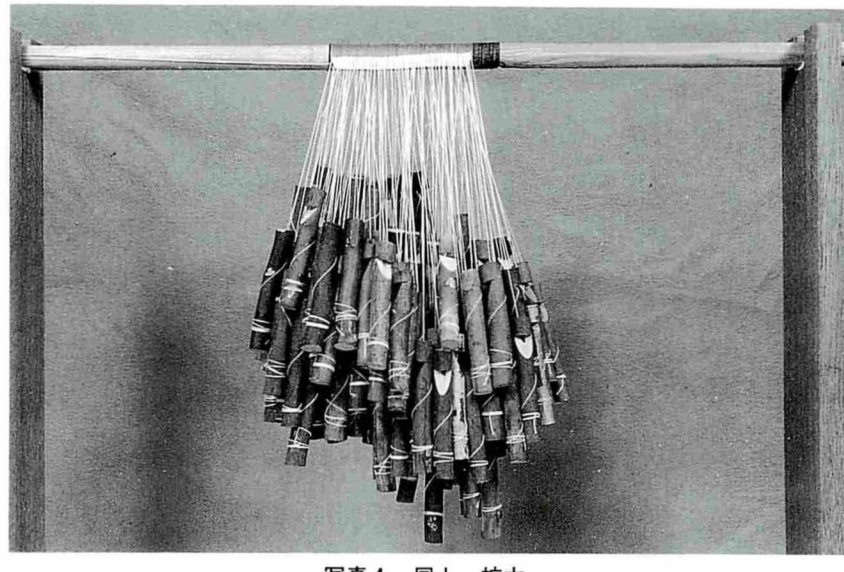

写真４　同上、拡大

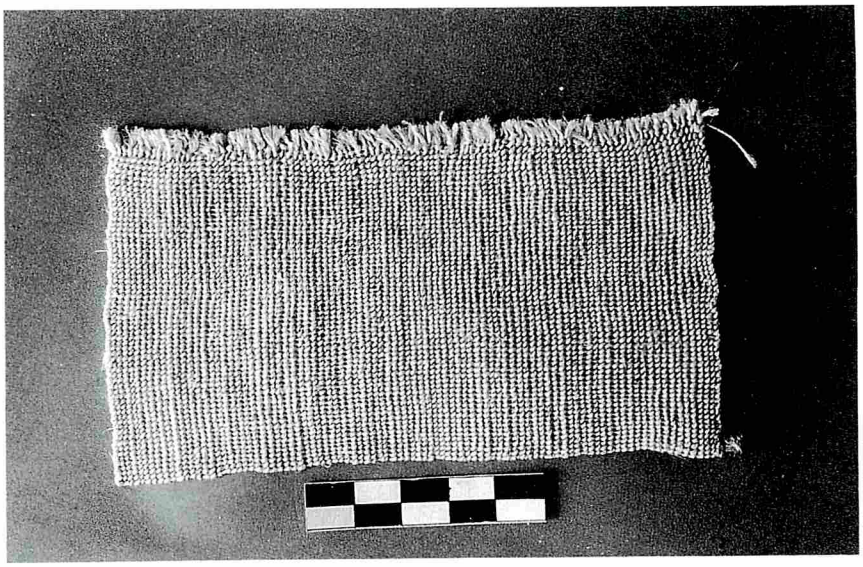

写真 5　中山遺跡出土編布の試作

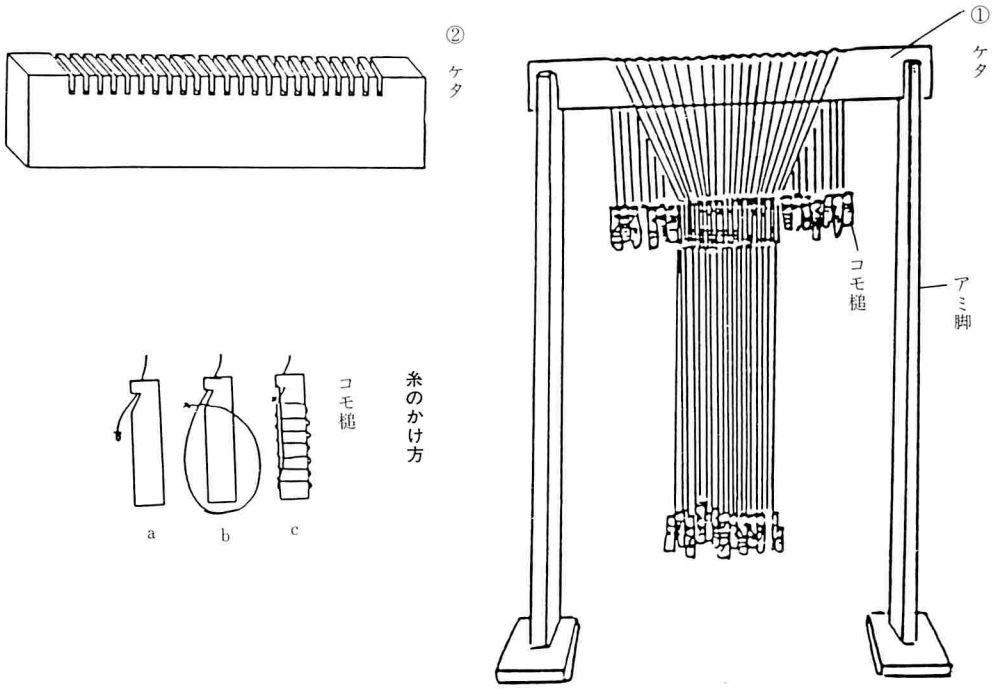

図 2　細密編布用の道具

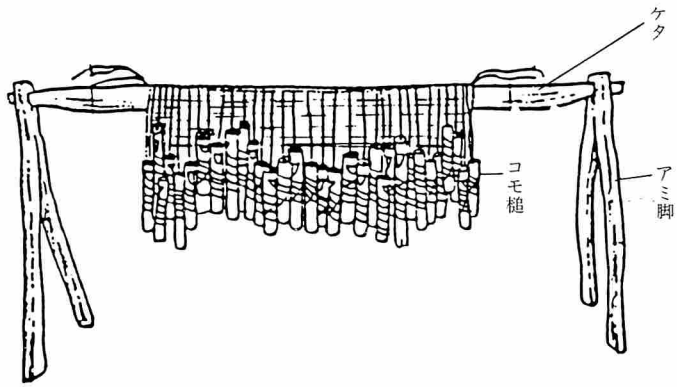

図3　越後アンギンの道具

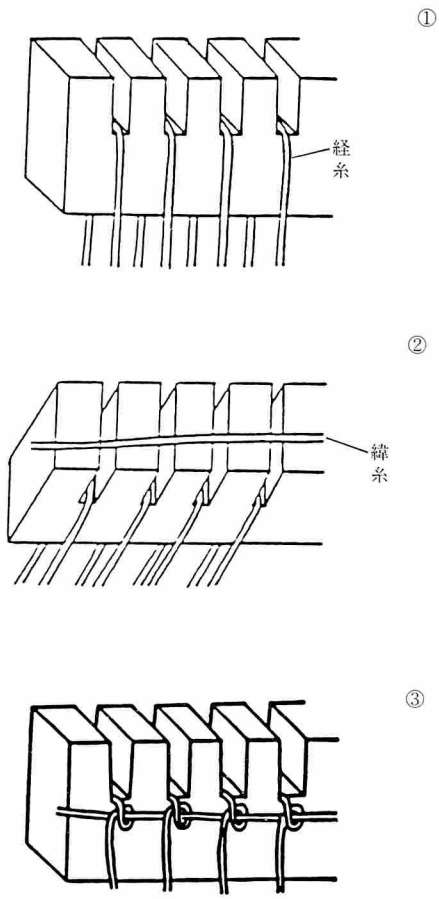

図4　基礎編布（出土編布）の編み方